

八十八歳のきのこ人生

—弟子から見た恩師・今関六也先生のこと—

翁茸（古川 久彦）

はじめに

今関六也先生は私の恩師です。そして、個人的には父親代わりの存在でした。私が信大農学部から当時の農林省林業試験場へ移って今関先生に弟子入りしてから先生がお亡くなりになるまでの35年間、先生の教えを受けてきました。それからは、先生から受けた教えを身に体してきのこの研究を続けて来ましたが、すでに私自身が先生の享年を越える年齢になりました。今日までの間、研究上の知識や技術のほかにも、社交的な礼儀や自分自身の心構えについても事細かに教えて頂いたことがどんなに役立ってきたかを思うと、今は感謝の気持ちで一杯です。ここに、在りし日の先生を想い出しながらあの頃を振り返って見ることにしました。

なおこの稿には、拙著『きのこ学閑話 (279) 忘れられない二人の恩師』と『恩師・今関六也先生を想う』、それに『「翁茸の日記帳 (30) 菌食の正しいとらえ方』から引用した部分が多々あります。これらは、すでに他の著書および雑誌に掲載していますので、その点ご承知おき下さいますようお願い致します。お読み下さる皆さまにはお目汚しになるかと思いますが、よろしくご容赦下さいますようお願い致します。

先生の経歴など

先生は東京都のご出身で、1904年3月に生



今関六也先生

れて、1991年7月に老衰のために逝去されました。享年86歳でした。

旧制の第七高等学校（鹿児島）の文科から東京帝国大学農学部へお進みになり、1928年に卒業。続いて副手として植物病理学教室に勤務。その間はサルノコシカケ科の標本整理をされて、これがきのこ研究への端緒になったようです。その後、科学博物館へ移りましたが、ここでの勤務時代（1932-47年）にはサルノコシカケ科の分類学研究に熱中するとともに、科学博物館の基礎研究部門の発展に尽力されました。戦後は目黒にあった農林省林業試験場に移り、保護部長として森林保護部門の整備と拡充に貢献するとともに、多くの菌類研究者を育成して学会や地域の指導者として送り出しました。退官後は、きのこの正しい知識を広めるために啓発書や図鑑類を多数執筆しています。

著書には『原色きのこ 茸の採集と見分け方』三省堂 (1942)、『日本のキノコ』山と溪谷社 (1974)、『つねに菌とともにあり』冬樹社 (1988) など、多数の著作があり、共著としては『原色日本菌類図鑑』今関六也・本郷次雄共著 保育社 (1957)、『続原色日本菌類図鑑』今関六也・本郷次雄共著 保育社 (1965)、『カラー自然ガイド きのこ』今関六也・本郷次雄共著 保育社 (1973)、『原色日本新菌類図鑑 (I)』今関六也・本郷次雄編著 保育社 (1987)、『原色日本新菌類図鑑 (II)』今関六也・本郷次雄編著 保育社 (1989)、『標準原色図鑑全集 第14巻 菌類 きのこ・かび』今関六也・本郷次雄・椿啓介共著 保育社 (1970)、『風流キノコ譚 一菌・自然・哲学』今関六也・本多修朗 山と溪谷社 (1988)、『山溪カラー名鑑 日本のきのこ』今関六也・大谷吉雄・本郷次雄監修 山と溪谷社 (1988)、『増補改訂新版 山溪カラー名鑑 日本のきのこ』今関六也・大谷吉雄・本郷次雄編・解説 山と溪谷社 (2011)、この他にも多数の共著があります。

先生のご専門は、菌類分類学および自然生態学で、日本菌学会会長を1970年から73年までの2期4年間と1975・76年の1期2年間を務め、日本の菌学の発展のために多大の貢献を残しています。また、日本植物病理学会では1960年には材質腐朽菌の分類および生態学的研究により日本植物病理学会学術賞が授与され、1970年には名誉会員に推挙されています。

私が先生から教えられたこと

その1. きのこを通して自然を知る

先生が常に言われていたのは、「机上の理論で知識を得るのではなく、問題を現場から得てくるのが本当の自然科学である」でした。つまり自然が師であり、現場が研究室であると言うのです。

① 私は先生がきのこ採集に出かける時には何時もお供をさせて頂きました。そして山道を歩きながら言われたことは、「きのこを通して自然を知る」でした。そのお声は何時も優しく、そして穏やかで、つい昨日のことのように私の脳裏に残っています。ある時のことです。私が覚えたばかりのきのこの名前を得意になって口にしていると、「古川君、きのこの名前を覚えることは大事だが、それよりももっと大事なことがあるのだよ」と言うのです。それは「きのこの名前を覚えるのは、大工の弟子が棟梁から、これは鉋でこれは鑿(ノミ)だと道具の名前を教えられて覚えるのと同じだよ。大事なことは、どんな時にどのようにして鉋を使うのか、またどのような場面でどのようにして鑿を使うのか、そのことを覚えることの方がもっと大事なことなのだ。きのこも同じだよ」と。つまり、きのこの名前を覚えると共に、そのきのこがどんな林の中で、何から生えていたのか、湿地だったのか、それとも乾燥地だったのかと、そのきのこの生態を覚えておけば、きのこを通してその山の自然を知ることができると言われたのです。

② またある時はこんな事もありました。きのこを探しながら歩いていると、ふとヌメリイグチが眼につきました。「ヌメリイグチはアカマツと菌根をつくるきのこだ。だから、ここの辺には必ずアカマツがある筈だ」と先生は言うのです。なるほど、そこには2~3本のアカマツが立っていました。

③ かなり傾斜のあるモミの林にオオモミタケが発生しています。ところが発生する場所が限られていて、山の尾根部と裾部には発生するが中腹部には発生しません。なぜでしょうか。「古川君、土壌を調べなさい」と先生は言います。早速、友人の森林土壌学者の手を借りて調べたところ、山の尾根部と裾部

の土壌の性質は同じだが、中腹部の土壌は異なっています。これは、傾斜が急な地形の場合には、尾根部の土壌が崩壊して崩れ落ちて長い年月の間に裾部に堆積したもので良くある現象だと言います。「菌根性きのこの発生は、単に寄主樹種だけの問題ではなく、土壌の性質や気象など立地条件に大きく支配されるものだ」と説かれた先生の含蓄のあるお言葉は忘れる事は出来ません。これが、菌類分類学者と同時に生態学者としての先生の基本的理念であって、拙著の『きのこ学』*共立出版株式会社（1992）の基本理念もここから生れたものです。

④ さらに、私の最初の論文になった今関先生・小林良子さんと共著の「キノコの生態に関する2・3の観察 -第70回日本林学会大会講演集p. 349-352 (1960)」は、先生の基本理念に基づいて行なったもので、そこに生えている菌根性きのこの種名が解ればその場所の土壌の性質が解ることを明らかにしました。つまり、菌根性きのこの生態を知っておけば、そのきのこの寄主（樹種）とその場所の土壌の性質が解るという新しい見解でした。

その2. きこの本当の性質は自然の中にある

ある年の秋のことでした。私が実験室でマツタケの子実体から分離した純粋培養した菌糸を用いて生理的性質を調べようとしているのを見ていた先生はこう言うのです。「古川君、その方法でマツタケ菌糸の性質が解るだろうか」と。そして、「マツタケ菌糸は自然界では土の中で生活しており、常に土中に棲息しているカビや細菌や微小動物などと競合したりあるいは共生したりして生きている。それなのに、試験管の中のマツタケ菌糸は生きもの一つない全くの孤立孤独な生活である。このような状態の中で調べても、それがマツタケ菌糸の本当の性質と言え

るだろうか」と言うのです。

それを聞いた私は、一瞬戸惑いましたが、言われてみれば先生がおっしゃる通りです。しかし、だからと言って直ぐにそれに代わる方法は思い当たりません。しばらく考えた末に思ったのは、新しい手法は時間を掛けてゆっくり考えるとして、当面は従来どおりの方法を用いることにも深い意味があると思ったのです。それは、試験管のなかの孤立孤独な条件の中だからこそ、マツタケ菌糸の純粋な性質が解るのではないかと思ったのです。爾来、私は必要に応じてこの方法を用いていますが、ここにも生態学者と生理学者の見解の相違があったのかと思っています。

その3. 森林病虫害の生態的防除論

人間も他の動物と同じように生態系の中では消費者として生活し、物質の生態的循環作用の一役を担っています。「もしも人間が生態系の秩序を乱し、自然の平和を破る事があったとすれば、必ず人間とともに生活している他の生物群からの攻撃を受けるか、または自らが導いた環境汚染によって肉体が害される結果になるであろう。森林病虫害の発生もこれと同じで、あたかも病原菌や害虫が森林社会の秩序を乱した張本人であるかのような対策が採られているが、生物学的に見るとそれは必ずしも正しくない。むしろ秩序を乱したのは、被害を受けた森林側にある」というのが今関先生のお考えです。この生態的自然観が基本になって、森林社会政策としての生態的防除論が生まれ、今関理念として一世を風靡したのです。

この考え方は、私たち人間の日常生活についてもいえるのではないのでしょうか。病気に罹る前の予防がいかに大切であるかを切実に物語っているのが今関理論なのです。私の「きのこ病理学総論」日本きのこ学会誌 16 (1) (2008) は今関理論をそのまま踏襲しています。

その4. 菌食論

菌類や微生物を利用した食べ物を摂ることを菌食と呼んでいます。菌食は今関先生が創られた言葉で、『林業技術』日本林業技術協会編 317・318号(1968)に「キノコ→ガン→長寿→菌食論(1)・(2)」と題して菌食を提唱しています。今関先生の考え方は、「健康の基礎は食生活であるが、これを保つためには菜食、肉食、菌食のバランスがとれた食物を摂ることが必要で、これが自然の法則にかなった健康食である」と言うのです。つまり、自然界は植物、動物、菌類の三者が互いに協力しながら調和を保っているという自然生態観が、この考え方の根拠になっているのです。

ところで、菌食といえば真っ先に挙げられるのがきのこです。日本人に馴染みの深い醤油や味噌も菌を利用して作られた食べ物ですが、同じ菌食でもきのこは菌自体を食べる菌食で、自然に恵まれた菌の有効成分をそのまま食べることが出来る食材です。また、栄養的にも優れた低カロリー食品として知られており、薬理的効果については専門的に書かれた書物が多数出版されています。個々のきのこの薬理的効果については省略しますが、確かにきのこの中には、抗腫瘍活性や神経成長因子の合成を促進するのに有効な成分があることは事実です。だからと言って、きのこさえ食べていれば医者も薬もいらないうことではありません。きのこの薬理的効果を正しく理解していないと、生焼けのシイタケを食べ過ぎて激しい胃腸障害を引き起こしたり、さらには腸閉塞になった例もありました。きのこが持っている薬理的効果は、発病に対する対抗力を増すとともに、病気の進行を制御するものであって、治癒的効果は期待できません。菌食の効果はまさにそれなのです。したがって私たちが健康体を維持し、生活活動の調和を保つためには、菌食

のみに偏ってはいは効果はありません。そこに、自然の法則にかなった健康食、すなわち菜食、肉食、菌食のバランスがとれた食物を摂る必要があるのです。このように、きのこは同じ菌食でも菌自体を食べる菌食で、自然に恵まれた菌の有効成分をそのまま食べることができる貴重な食材であることに着目して菌食論を創設し、菌類の食品の価値を世に広めた今関先生の見識は、まさに偉業といっても過言ではありません。

世の中には多くの料理研究家がおられます。この方々は、食育という言葉を探り上げて、子供の頃からの食の大切さを説明し、身体に良いものを選ぶようにと広く教育しています。これからは、成人に対してもなお一層食にたいする理解を深めて、調和のとれた食事を考えなければならぬ事を強調して頂き、今関理論の正当性を多くの方々に普及して下さることを切に願っています。

その5. 菌無尽

現在知られている世界の菌類の種数は、子囊菌類が約 64, 163 種、担子菌類が約 31, 515 種(『Dictionary of fungi』2008年版による)とされています。しかし、今後の研究によってまだまだ増える可能性は充分にあります。この事を今関先生は「菌無尽」と表現しました。そして、「尽きることが無いほどの数の菌類を研究するには、数少ない専門研究者の手では到底及びもつかないと思う。そのためには、アマチュアの協力を得なければならぬだろう。古川君、君はきのこの分類学を一生の仕事として進めて行ってくれないか」と私に言いながら、一方ではアマチュアの方々を非常に大切にしていました。地域の同好会から講演や指導を頼まれると、直ぐに出掛けて行って膝を交えて親しく話し合っていました。この事は、何時も行動を共にしていた私が一番よく知っています。

私の机の前には「菌無尽 六也」と書いた短冊が掲げてあります。これはあの時、「古川君頼むよ！」と言って渡してくれた短冊です。私は先生の期待どおりには出来ませんが、八十路を過ぎた今も、何時も先生に見守られている事をこの上もなく幸せに思っています。

その6. 生物学は、生命学か生活学か

生物学は人間の生活にとって重要な科学であり、また極めて複雑多彩な専門分野に分かれている膨大な科学です。そのために、ともすれば知識の羅列にとどまり、生物学が全体として目指す究極の目標が曖昧になりやすい憂いがあります。つまり統一された生物学観が不明確だからです。

以前、アメリカで生物学の学校教育が論じられた時に、生物学者の生物学観が三つに分かれた事がありました。それは、急速に発展した自然生態学と分子生物学の影響を受けて、一つは生態学的生物学を、一つは生命学的生物学を、そしてもう一つは従来と同様な常識的生物学の三つでした。同じ頃、日本でも指導的な生物学者たちによって生物学研究の長期計画が立案されたが、その中で基礎生物学は、「一方では生命の基本的な法則を解明すると共に、他方では生物とそれを取り巻く環境との相互作用から生物集団の法則性を解明する事によって、人類の生活を保障するための条件を明らかにする」と定義されています。要約すれば、生命の本質を定めるとともに、生物の生活の法則を研究する科学ということになり、結局は生命学と生活学になります。

この問題について今関先生(1987)は、次のように提案されました。すなわち、「生命の神秘を探ることは誰もが抱く念願であり、情緒的にはそれが生物学の究極の目的であるかのように考えられるが、理性的には生活

の法則を極めることが生物学の大目標である。生物学とは、生物が地球上でいかなる生活を営んでいるかを明らかにする事によって、人類は生物としていかに生活すべきかを学ぶ科学であるとし、生命学は生活学を確立するための一つの礎石である」と結論しました。生活学であるとした根拠には、「自然界における生物の生活には、試験管の中で営まれるような孤立孤独な生活ではなく、生物共同体の一員としての生活である。したがって、生活は環境と切り離すことが出来ないから、すべての生物は生態系の一員として生活している」という自然を直視した理由を挙げています。この考え方の根底には、Odumの思想があることは言うまでもありません。

と言うのは、東京・目黒の森に研究所があった頃、生態学に関心を持った数人の若者が集まってセミナーを開いていました。その時のリーダーが今関先生で、E. P. Odumの理論を徹底して追及したものでした。以来、私も今関理念の薫陶を受けてOdum思想に傾注したものです。この稿も今関理念をそのまま踏襲したもので、大部分は師の原著(1970、1987)から引用したものです。今頃は草葉の陰で、不肖の弟子のなせる業と苦笑しているかもしれせん。あの優しい目差しと、温かみのあるお声を今も思い出しています。

その7. 原色日本新菌類図鑑(Ⅱ)

1988年に私が森林総研から大分県へ移る少し前に、しばらく見えなかった先生が突然私の部屋(きのこ科長室)に来られました。そして、「保育社の『原色日本新菌類図鑑(Ⅱ)』を書かなければならないが締め切りの期日までに間に合いそうもない。君も忙しいだろうが何とか助けてくれないか」と弱々しいお声で言うのです。私にとっては、父親にも勝る先生の頼みであるので即座にお引受けし、ヒダナシタケ目の一部*をお手伝いしました。

今になって考えると、あの頃から体調を崩されておられたのかも知れません。私が大分県でこの専門の研究所を開設したことを先生は大変喜んで下さって、是非見たいと言っておられました。私もお呼びしたいと思い、先生のお身体のご様子を窺っている間に先生は逝ってしまいました。なんとも残念なことで、先生に公立では日本でたった一つしかないこの専門の研究所をお見せ出来なかったことは、私の一生の悔いとして残っています。

その8. 人と自然の共生、社会との調和

私が先生から受けた教えは、研究上の知識や実験手法だけではありません。たとえば、「研究者はとにかく実験室に閉じこもりがちであるが、むしろ積極的に自然に中や社会の中に溶け込んで、幅広い知識を身につける努力が必要である」と何時も言われていました。また、「ときには行政関係の人にも会って、互いに意見を交換すべきである。とくにきのこ産業の更なる発展は、研究だけで出来るものではない。研究と行政との相互協力が必要だ。だから時々霞ヶ関へも足を運びなさいよ!」と、熱っぽく説いてくれました。

毎年、年度末になると夜を徹して仕事をやる日が続きます。これを見ていた先生は、私にこう教えてくれました。「一仕事終わったら研究室の人たちと慰労の会を持ちなさいよ!。若い人たちの労をねぎらい、元気を与え、熱意を培うのが上に立つ者の務めだよ!」と。このように、先生は何気なく私に人生の教訓を授けてくれたのです。人と自然の共生、社会との調和、これが先生から受けた人生最大の教訓です。

先生のお人柄について

先生は、旧制七高の文科から東京帝大農学部へお進みになった方で、文才には非常に秀で

ておられました。そして、講演などは穏やかな口調で静かに解りやすく、諭すように話していました。また、筆をとっても非常にきれいな文章をお書きになりました。これらは「つねに菌とともにあり」や「森の生命学」などの著書に残されています。また、英語がお得意で外国からの来訪者には綺麗な英語で応対されている姿が思い浮かびます。

先生は、緑茶が大好きでした。部長室の一隅には何時も風格のある急須と九谷焼の上品な茶碗が用意されてありました。そして、最高級の狭山茶が好みのもので、来客があるご自分でお湯の温度を加減しながら丁寧に持てなしていました。私も時々ご馳走になりましたが、小さな茶碗の中に淡い緑色の茶が入っていて、飲むというよりも嗜んで口にすると、深くて芳しい香りがほのかにした事を覚えています。一方、お酒の方も好きのようでしたが、中でも洋酒を嗜んでおられました。そして、宴会などで場が賑やかになると、何時も歌うのが宝塚歌劇団の「すみれの花咲くころ」でした。その歌声は優しく静かに流れて、情緒たっぷりの雰囲気一同は静かに聞き入ったものです。

退官されてからは、神奈川県逗子のご自宅に移られて静かな日々を送っていましたが、時々相談事を持ち込まれたり、きのこの鑑定を頼まれたりする事があったようです。そして、その都度私が呼び出されてご自宅へ行き、お手伝いした事が何回もありました。また、お庭の片隅の庭木の下には10数本のシイタケほだ木が置いてあって、時々散水しながら楽しんでおられたようです。シーズンになってきのこが発生すると大喜びして電話で知らせてくれたものです。またある時には、庭のほだ木に雑菌が着いたことがありました。そして、急いで来て何とか処置してくれとの電話を受けて急遽逗子へ伺ったこと

もありました。この辺りの配慮は、やはり先生は菌学者であり、また生態学者であると思っただ次第です。

平穏で優しくあった先生の人柄を慕って、先生のご自宅には研究者は勿論のこと全国から多くのアマチュアの方々が訪ねて来ていました。そして、殊更に分け隔てすることなくどなたとも親しく接しておられました。私はこの姿を目の前にして、さすが先生は心の広い立派な方だと強く心を打たれた事がありました。

おわりに

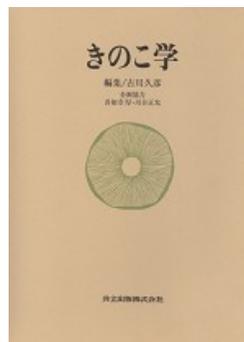
この稿を書き始めたのは盛夏も終わりに近い8月の末でした。途中、体調の不良が重なってどうにか出来上がる迄には約2ヶ月を要しました。今日の窓外は晩秋の風が冷たく、紅葉も色褪せて落葉になって風に舞っています。

若い頃は顕微鏡下での観察が中心だったために、細部まで見逃さないようにとの配慮に明け暮れて来ましたが、近頃になってようやく物事を広く深く観ることが出来るような年齢になったのかと思っている今日この頃です。これも、35年間の長きにわたって指導を受けた恩師・今関六也先生の教訓のお陰だとしみじみ思っている所です。私はすでに外野の立場になりましたが、これからは今関先生の教えに習って、未だに頼ってくれる弟子たちのために、何事も幅広く観て深く考える心を持つようにと教えて上げたいと思っています。今関先生、有難うございました。

(2015. 10. 25 稿)

* 『きのこ学』

古川久彦 編集、善如寺 厚・川合正允 企画協力
共立出版株式会社 (1992)

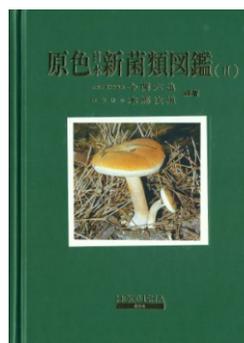


きのこを科学的に解析し、利用するための手引書として、きのこの生物学的な基礎理論から生産、利用法に至る幅広い分野を総合的かつ体系的に編集

— 共立出版株式会社のHPより

** 『原色日本新菌類図鑑 (Ⅱ)』

今関六也・本郷次雄 編著 保育社 (1989)



ヒダナシタケ目コウヤクタケ科(2)、ニクハリタケ科、サンゴハリタケ科、カノシタ科、エゾハリタケ科、マツカサタケ科、イボタケ科の目次欄に、“古川、今関”の名があります。 (編)